

イギリスにおける中国系移民のエスニシティー--第一世代・第二世代における人間関係構築の比較から

著者	山本 須美子
著者別名	YAMAMOTO Sumiko
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	42
号	2
ページ	81-99
発行年	2005-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003284/

イギリスにおける中国系移民のエスニシティ —— 第一世代・第二世代における人間関係構築の比較から ——

The Ethnicity of Chinese People in Britain: A Comparative Analysis of the Construction of Human Relationships by First and Second Generation Chinese Immigrants

山本 須美子
YAMAMOTO Sumiko

【目 次】

- I. はじめに
- II. チャイニーズ・オーガニゼーションの人間関係構築に果たす役割
 - 1. ロンドンにおけるチャイニーズ・オーガニゼーション
 - 2. チャイニーズ・コミュニティ・センターの概要
 - 3. チャイニーズ・コミュニティ・センターの人間関係構築に果たす役割
- III. 第一世代の人間関係のあり方
- IV. 第二世代の人間関係のあり方
- V. 考察—イギリスにおける中国系移民のエスニシティ
- VI. おわりに

I. はじめに

F.バルト(Barth 1969)が、エスニック集団を言語、宗教、慣習、出自、人種等の属性を共有する集団とする古典的な概念を覆して、構成員の主観的な帰属意識を概念の中心に据える立場を提唱して以来、エスニシティ研究の中心的関心は、エスニック集団の境界に向けられている。綾部は、「エスニシティ」(ethnicity)という概念を、「エスニック・グループが表出する性格の総体」と定義している(綾部 1993: 13)。本論も綾部の定義を用いるが、この定義が示すように、エスニシティという概念は曖昧性を内包しているといえる。竹沢は、エスニシティ概念を従来の「民族」が表す現象と異ならしめるものとして、相互に関連する二点を指摘している(竹沢 1994: 14)。一

つは、この概念が極めて相互作用を重視していることである。エスニシティ概念は、相互作用を重視することにより、絶えず変化する境界とそれによって規定されるエスニック集団を動態的に捉えることが可能であると指摘している。もう一つは、エスニシティ概念では、「ある社会の中で」と枠組みが限定されていることが多く、文化的属性の共有あるいは共有感よりも、むしろ当該社会での社会的脈絡や他のエスニック集団との関係が問題となると述べている。つまり、竹沢の指摘するように、エスニシティ概念は、エスニック集団の構成員が集団内外の人と交流することによって生じる「相互作用」と密接な関係があるといえ、その分析のためには構成員の人間関係のあり方に着目する必要があるのである。

エスニック集団の構成員の人間関係のあり方からエスニシティを論じた研究の一つとして、キープとパディーラの研究を上げることができる (Keefe & Padilla 1989)。メキシコ系アメリカ人のエスニシティについて論じたキープとパディーラは、メキシコ系アメリカ人が学校や職場ではアングロ系アメリカ人と相互交流をするが、世代を経てもインフォーマルな親密な付き合いはエスニック集団内に限定され、それがエスニシティの持続の重要な要因であることを指摘している (Keefe & Padilla 1989:7)⁽¹⁾。ここでは人間関係の分析をする際、それを一次的関係と二次的关系に区分している。一次的関係とは、家族や友達のような親密でインフォーマルな相互関係であり、二次的关系とは、職場や学校や政治的領域などにおけるそれほど親密ではない、よりフォーマルな関係である。これら二つの関係は、例えば隣近所や教会やヴォランティア・アソシエーションにおける人間関係がどちらに属するのかを一般化することはできなく、厳密に区別することはできないとしている。そして、キープとパディーラは、メキシコ系アメリカ人の場合、エスニック・マイノリティと多数派集団の間では二次的关系は結べるが、一次的関係はあまり結ばれていないことがエスニシティの持続の要因となっていると指摘している (Keefe & Padilla 1989:18-19)。

本論の目的は、イギリスの中国系移民の第一世代、および第二世代が、それぞれどのような人間関係を構築しているのかを、ロンドンにおける現地調査に基づいて明らかにすることを通して、イギリスの中国系移民のエスニシティについて考察することである。キープとパディーラがメキシコ系アメリカ人において指摘したように、多数派集団との間に二次的关系は結べるが、一次的関係は結べないといえるのか、そして、それは第一世代と第二世代では違いがあるのかを検討し、それを通してイギリスの中国系移民のエスニシティについて考察したい。

イギリスの中国系第一世代は、主流は1960年代をピークに主に香港の新界から流入した農夫の出身者であり、第二次大戦後のイギリスの中国料理ブームに乗って、その8割以上が中国料理に関わる飲食業に携わっている。2001年センサスでは、中国系の人口は約25万人である (Office for National Statistics, 2001)⁽²⁾。他の移民が都市に集住しているのとは対照的に、中国料理のレストランやテークアウェイ・ショップを全国各地で営んでいるゆえに、散らばって住んでいる。⁽³⁾ロンドンやマンチェスター等の大都市には中華街はあるが、あくまで商業地区であり、居住地としてのエスニック・コミュニティを持たない。現在若い世代の多くは、イギリスで生まれイギリスで教育を受け

ている。彼らは、高等教育を受ける比率が高く、親の携わっていた飲食業を抜け出し、様々な職種に進出している。⁽⁵⁾

従来、華僑・華人社会における人間関係の研究は、同じ中国姓を有する人々によって結成される同姓団体（宗親会および宗親総会など）や中国での故郷や父祖の地を同じくすることによって結成される同郷団体の社会的機能に関心が向けられてきた。⁽⁶⁾つまり従来の研究は、移住先でいかに中国系の人々同士が地縁や血縁によって結びついているのかという視点から検討されてきたといえる。しかし、本論で対象とするイギリスの中国系移民においては、同姓団体はあるもののあまり機能していない。また、居住地としてのエスニック・コミュニティを持たないという特徴を有する。本論では、第一に中国系以外の人々との人間関係のあり方も視野に入れること、第二に人間関係のあり方の世代的な違いに留意することによって、従来の華僑・華人社会の人間関係の研究に対して、新しい視座を提示したい。

分析の手順としては、第一に彼らの人間関係構築という観点からみた場合、どのようなオーガニゼーションが、どのような機能を果たしているのかを明らかにする。次に、第一世代、第二世代のそれぞれの人間関係のあり方を、一次的関係と二次的關係がどのように構築されているかという視点から検討する。そして、最後に、第一世代と第二世代の人間関係のあり方を比較検討することを通して、イギリスの中国系移民におけるエスニシティについて考察する。

なお、筆者は、ロンドンにおいて⁽⁷⁾、1989年から1990年の1年間の滞在後、現在に至るまで短期的調査を断続的に積み重ねてきた。特に本論は、2003年8月の調査から得た結果を中心に、それ以前の調査結果も踏まえて検討する。

Ⅱ. チャイニーズ・オーガニゼーションの人間関係構築に果たす役割

1. ロンドンにおけるチャイニーズ・オーガニゼーション

ジョーンズによると、初期にイギリスへ移住してきた中国人は、1834年の広東での東インド会社の独占終了後、イギリスと中国との間でのアヘンやコカインの取引競争の増加によって、船員として安い賃金で定期的に雇われるようになった中国の福建や広東出身の農夫達であった（Jones 1979:397）。19世紀の終りごろには、ロンドン、リバプール、カーディフ等に小規模ではあるがドックの近くに中国人によるコミュニティができた。ロンドンの場合、1851年には中国大陸南部出身者が78人住んでいたといわれる。それ以降、ロンドンに住む中国人は次第に増えて、1880年頃にはライムハウス周辺には中国人のコミュニティが形成され、1911年には中国人人口は1319人になった（Ng 1968:6）。ロンドンにおける最も古いオーガニゼーションは、1906年に設立された Hui Tong Kung Sheng Association である。これは、船員を中心とする相互扶助組織で、今日では名称を Chun Yee Society と改め、社交とギャンブルのクラブとして存続している。他に Oi T'ung Association や The Chinese Mutual Aid Workers Club (1916年設立) などがある。これらは、クランや

リネージの結びつきを中心に作られた団体で、差別に立ち向かい、中国人に逃避所を提供する役割を果たしていた(Chann 1982)。

しかし、現存する中国系の団体は、ほとんどが第二次世界大戦後に設立されたもので、初期のものとの繋がりはない。なぜなら第二次大戦後の中国系移民は、戦前の移民とは出身地が違っているからである。戦前の中国系移民の出身地は、中国の福建や広東であったが、戦後の中国系移民の主流は香港の新界である。また職業も船員ではなく飲食業に従事したため、戦後新しい団体を作ったのである。戦後に設立された代表的なものに、London Kung Ho Association(1947年設立)や、Chinese Chamber of Commerce UK(1968年設立)などがある。これらは、初期のオーガニゼーションのように、差別に立ち向かうための避難所というよりは、教育やリクリエーションに力を注いだ。London Kung Ho Associationは、設立当初の会員は30人であったが、現在会員は約1000人である。設立当初は、单身男性の集まりで、ほとんどの会員は低所得の労働者階級であり、組織運営のための財政的基盤がなかった。特に香港からの移民の流入が増加した60年代になって会員数が増加し、その後女性や子供の移民も増加し発展した(London Kung Ho Association 1990:13)。1968年には、中国語の補習校を設立した。会員になるには、既に会員である者2人の推薦が必要であり、年会費は20ポンドである。目的は、「会員の友好と相互扶助を強化し、会員がイギリス社会に統合できることを助ける」ことである(London Kung Ho Association 1990:13)。主な活動は、中国語の補習校の運営、日曜日の中国楽器クラス、正月や清明節にパーティーを催したりすることである。

『チャイニーズ・オーガニゼーション一覧』は、中国系コミュニティのサービスを紹介し、イギリスの中国系ネットワークを形成することを目的に2001年に作成された冊子である。ここには、全国で106団体、ロンドンには64団体が記載されている(The Chinese in Britain Forum & The Chinese Information and Advice Centre 2001)。サービス別では、相談：41団体、諮問：10団体、芸術：20団体、介護サービス：28団体、氏族：5団体、文化的活動：52団体、教育：58団体、高齢者向けサービス：23団体、健康増進：20団体、法律：1団体、図書館：2団体、出版：5団体、宗教：2団体、スポーツ：14団体、貿易：6団体、翻訳と通訳サービス：31団体、女性向けサービス：27団体、ユースクラブ：19団体となっている。なお、一つの団体が複数のサービスを提供している場合が多い。

同じ中国姓を有する人々によって結成される同姓団体(宗親会および宗親総会など)は、この一覧によるとロンドンに5団体ある。柿沼は、「伝統的な氏族の組織も1960年代から70年代にいくつか作られてはいるが、在英中国人の日常生活では、世界の他の地域に住む華僑に較べて、それほど重要な役割は果たしていない。」と述べている(柿沼1991:303-304)。現在ロンドンにある5つの同姓団体(Cheng's Clansman Charity Association, Chinese Mutual Aid Workers' Club, Five Yip Chinese Association, Man's Clansmen Association, Europe, Yangzhou Association UK)は、会員も限られ、ほとんど機能していない状況である。同姓団体の一つであるMan's Clansmen Association(文氏宗親会)は、ワトソンが移民母村である香港の新田(San Tin)における1969年から1971年に

かけての20ヶ月間の調査に基づいてその詳細を明らかにした組織である（ワトソン 1995）。新田は、すべての男性が共通の文（Man）という名字をもち、14世紀にこの地域に住んでいた共通の祖先から直系出自をたどることができる村である。1970年代には、この村の働ける男性の85～90％がイギリスを中心にオランダ等に移住していた。ワトソンは、文氏宗親会が渡航費用の貸し付けから就職先の斡旋や手続き等の移住に際しての作業を担っていたことを明らかにし、宗族が移住の斡旋機関として機能していたことを指摘している（ワトソン 1995：91 - 106）。現在、文氏宗親会はロンドンのチャイナタウンに事務所があり、中国系移民の間では、名前は知れ渡っている。しかし、事務所はほとんど閉まっていた、目だった活動はない。文氏宗親会の一員である1953年にロンドンに移住した現在70才の香港出身の男性によると、文氏宗親会は移民当初は移住の斡旋期間としての役割を担っていたが、現在会員は皆高齢化し、顔なじみがたまに集まる程度ということである。

また、前述の一覧で宗教として記載されている2団体は、ロンドン仏教・道教信者協会とロンドン中国系教会である。その内、特にキリスト教教会であるロンドン中国系教会は、中国系でありクリスチャンである人を結びつける役割を果たしている。ロンドン中国系教会として現在ロンドンには21教会が登録され、広東語や北京語、英語での礼拝を行なっている。2001年センサスによると中国系人口の内、キリスト教徒は22％である。⁽⁹⁾ 筆者は設立39年目のロンドンで最も古いSt.Martin教会を訪れた。⁽¹⁰⁾ 広東語の礼拝の後、教会の地下で懇親会があったが、そこには香港からの留学生や香港から働きに来ている人、25年前に香港から移民してきた人、その第二世代など30人位が集まっていた。もう20年間この教会に通っているというレストランで働く男性は、この懇親会で友人を見つけたし、知り合いも多いと語っていた。どの教会もSt.Martin教会と同じように礼拝の後に懇親会を催していて、中国系教会を通して、同じ中国系のキリスト教徒との人間関係を構築していることが指摘できる。

以上のようなチャイニーズ・オーガニゼーションの内、現在、ロンドンの中国系移民の日常生活に最も入り込んでいるのは、1980年代から公的資金の援助を受けて設立されたチャイニーズ・コミュニティ・センターである。以下、チャイニーズ・コミュニティ・センターはどのような活動をしているのかを検討し、中国系移民の人間関係構築に果たしている役割を考察する。

2. チャイニーズ・コミュニティ・センターの概要

チャイニーズ・コミュニティ・センターの設立の目的は、Haringey Chinese Centreのパンフレットによると以下のようなものである。「ハリンゲイ地区の中国系住民のニーズに合うような、社会的、教育的、文化的、及び福祉のサービスを提供することによって、中国系住民の生活の質を高め、ハリンゲイ・カウンスルや他の地方当局と提携し中国系住民をより広いコミュニティに統合することである。」(Haringey Chinese Centre : Annual Report 2000-2001)。他のセンターも同じような目的を掲げている。

1989年と1992年に香港政庁事務所の発行したリストには、ロンドンにおいて7つのチャイニー

ズ・コミュニティ・センターが記載されている(Hong Kong Government Office 1989、1992)。最も古いセンターは、1980年に設立されたロンドンのソーホー地区のチャイナタウンにあるChinese Community Centreである。前述の2001年に出版された『チャイニーズ・オーガニゼーション一覧』では、ロンドンのチャイニーズ・コミュニティ・センターは全体で14に倍増している(The Chinese in Britain Forum & The Chinese Information and Advice Centre 2001)。各センターには、中国語と英語のバイリンガルの中国系職員(香港からの留学生、中国系第二世代、シンガポールやマレーシア出身の中国系第一世代)が10人前後いて、事務所を構えている。

チャイニーズ・コミュニティ・センターは、その地域の区役所や各方面からの寄付によって資金援助され運営されている。しかし、近年になって中央及び地方政府は、任意団体への補助金を削減する方針を打ち出し、どのセンターも補助金をカットされているため、資金難に苦しみ、資金調達に四苦八苦している。

加入要件に関しては、例えば同姓団体は姓を同じくすることを、同郷団体は中国での故郷や父祖の地を同じくすることを基本的な加入要件としている。これに対してチャイニーズ・コミュニティ・センターは、そのセンターの近隣に居住する中国系であることが加入要件である。しかし居住地によって個人が厳密にどのセンターに属するかが決められているわけではない。原則的に近隣にあるセンターに加入する人が多いが、同じような距離に二つのセンターがある場合、どちらを選ぶかは個人の選択に任されている。また、主に中国系インドシナ難民や中国系ベトナム難民のためのセンターもある。しかし、ほとんどのセンターは中国系であれば加入者の出身地は問わないので、その出身地は香港、シンガポールやマレーシア、中国本土各地など様々である。Haringey Chinese Centreの1997-1998年次報告によると、70歳以上の会員は、全員永久会員になり毎年加入を更新する必要はなく、ニューズレターが配布される。スタッフも同じ特権を持つ。60歳～70歳の会員は、永久会員になるためには10ポンド払う必要がある。それ以外の会員は、家族会員で1年契約だと4ポンド、5年契約だと15ポンド、個人会員で1年契約だと2.5ポンド、5年契約だと8ポンドを払う必要があり、自由に選択できる。センターによって違いがあるが、平均会員数は約1000人で、会員数は年々増加している(Haringey Chinese Centre ,Annual Report 1997-1998:3)。

活動内容は以下のようなものである。どのセンターも活動内容にほとんど違いはない。

① アドバイスサービス

英語の会話力も読み書き能力もない高齢者が、イギリス社会で生きていくためにぶつかる様々な問題(住居、社会保障、健康、移住や帰化、雇用、法的手続き、教育、失業等のあらゆる分野の問題)に対して、英語と中国語の話せるバイリンガルのスタッフが解決の手助けをする。例えば税金や失業保険の説明、彼らにとって馴染みのない福祉制度の利用を勧めたり、様々な書類の作成、通訳としての病院への付き添いなどがこれに含まれる。近年高齢者だけではなく、難民やイギリスに來たばかりの人もこのサービスを利用している。

② ホームケアとデイケア

主に高齢者を対象としたもので、家庭訪問をして家事の代行をしたり、依頼を受ければ食料品や衣服等の買い物も手伝うサービスがホームケアである。ケアを実際に行うのは、センターの会員の40～50代の主婦で、センターに登録して、随時派遣されている。また、一人では過ごすことのできないケアの必要な高齢者をセンターで1日数時間、介護士が付き添って預かるのがデイケアである。これらのサービスは、まだすべてのセンターで実施されているわけではない。

③ 老人会

老人会の中心的活動は、高齢者が集まって中国料理を食べる昼食会であり、週に平均3日間催されている。どのセンターも昼食会を活動の中心に位置付けている。食事は1食、2ポンド以下の低料金である。通常20～40人ぐらいの高齢者がお昼前に集まってくる。彼らに中国料理を作るのは、40～50歳代の中国系の主婦で、1日に25ポンド程度の報酬をもらっている。高齢者は、中国語でおしゃべりをしながら食事をし、食後は花札や碁をしたり、中国語のビデオを見たりする人もいる。またこうして作った中国料理の昼食を、弁当として高齢者に宅配するサービスも行っている。昼食会とは別に、毎月の誕生日会やクリスマス・パーティも催している。

④ 英語クラス

大人を対象とした英語クラスで、成人教育の一貫として、1989年に内ロンドン教育局が廃止されるまでは資金援助を受けていた。参加者は、近隣に住む40代～60代の主婦が中心で、退職後の男性も参加している。

⑤ 中国語クラス

どのセンターも子供のための中国語の補習校を運営している。週末に2時間、母語である広東語の読み書きを中心に教える教室で、中国系第二世代はほとんどが中国語の補習校に通った経験を持っている。中国語の補習校は、全国に100校以上あり、キリスト教会や他のチャイニーズ・オーガニゼーションによっても運営されている。

⑥ 中国音楽クラス

中国の伝統的な楽器のレッスンを受けられるクラスである。どのセンターも参加者は大人が数人である。たまに10代の若者も参加していることもある。

⑦ ユースクラブ

若者がバドミントンや卓球をしたり、中国語のビデオを見たりする。センターの活動としては活発な部門ではない。しかし、例えば、Lambeth Chinese Community Associationで1992年に行われた演劇のワークショップは、そこに参加していた20人の若者に連帯感をもたらした。現在のイギリス社会で自分達が中国人であるということはどういうことなのかを考え、自分達をステレオタイプ化して捉える主流社会に自らをアピールしたいとして、小冊子を出版した（Lambeth Chinese Community Association 1992）。これはその後、さらに人数を加えて本として出版され、中国系作家によるイギリスで最初の文芸書となった（Lambeth Chinese Community Association

1994)。しかし、これは例外的な活動で、2003年に筆者がLambeth Chinese Community Associationを訪れた際、センター長にこのユースクラブのその後の活動について尋ねたが、今はユースクラブの活動は全くなく、1年前に就任したセンター長は過去に本が出版されたことも知らなかった。

⑧ 婦人会

20人位の主婦が一週間に一度集まって、話したり、手芸をしたり、中国料理教室を開いたり、時にはミレニアムドームや博物館に見学に行ったりする。またIslington Chinese Associationのように、婦人会のメンバーが中国歌のコラスグループや京劇のグループを結成して、センターでコンサートを催している場合もある。

⑨ サマースクール

夏休みに幼児から10代前半の子供を対象として、センターで習字や絵画やゲームをしたり、博物館や映画館やレジャーランド等に連れて行く。筆者は、1990年と1996年にHaringey Chinese Centreのサマースクールを参与観察した。参加者は、ほとんどが毎年参加していて、1990年には20人ぐらいだったが、1996年には30人ぐらいになっていた。1990年にはスタッフ2人が教師として引率していたが、1996年にはスタッフ2人に加えて、10代後半の若者7人がアルバイトで手伝っていた。これらの若者は、自らもサマースクール経験者であった。サマースクールは、すべてのセンターで企画されているわけではない。

⑩ イベントの企画

お正月、清明節などのフェスティバルを企画する。中国の伝統舞踊団をフェスティバルの出し物として呼んだりもする。またHaringey地区では、2000年にミレニアムを祝って、他のエスニック・マイノリティのセンター（アフリカ系及びカリブ海系、アジア系、サイプロス系、アイルランド系）と共催で、多文化フェスティバルが催された。

また、センターは月曜日から金曜日の朝から夕方まで開いているので、特定の活動に参加するためにだけでなく、中国語の新聞や雑誌、あるいはビデオを見るためや、友人とおしゃべりをしたり花札や碁をするためだけに立ち寄る人もいる。

Haringey Chinese Centreの2000-2001年の年次報告によると、各活動へのべ参加人数は30282人である(Haringey Chinese Centre,2000-2001:6)。センターの活動の中で、最もべ参加人数の多いのは、中国語の補習クラス6400人である。次に電話によるアドバイスサービスの6250人、そして昼食会の3250人と続く。のべ参加人数の多いこれらの活動が、センターの中心的活動であるといえる。

3. チャイニーズ・コミュニティ・センターの人間関係構築に果たす役割

チャイニーズ・コミュニティ・センターは、現在中国系移民の日常生活と最も関わりの深いオーガニゼーションであるが、人間関係構築という観点からみた場合、どのような役割を果たしているのだろうか。チャイニーズ・コミュニティ・センターには、幼い子から高齢者までが関わってい

る。人間関係構築に果たす役割を検討するために、第一世代と第二世代に分けて考えたい。そしてさらに第一世代も、60歳代以上の高齢者と40歳代～50歳代の人に分けて検討する。

まず、60歳代以上の第一世代の高齢者にとって、近隣にあるチャイニーズ・コミュニティ・センターは、困ったことがあったら援助を求められる場所である。近くに住んでいても子供と同居している人はほとんどいない。また人間関係構築という観点からみれば、昼食会に参加したりセンターに立ち寄りたりすることを通して、同じ中国系の人と交わることでできる場である。Chinese Community Centreの21周年記念の冊子には、以下のような声が掲載されている(Chinese Community Centre 2001: 14)。

「私は、毎日の生活をセンターのサポートに支えられています。特に体の不自由な夫の世話を助けてもらっています。もしセンターがなかったら、私の生活はどうなっていたのか、想像できません。日々の生活の負担は、伝統的な中国人の妻としての私にかかってきます。また、センターは私を物理的に助けてくれるだけではなく、精神的な支えともなっています。」(82歳・女性)

「私は、アドバイスサービスを利用しているし、老人会にも参加しています。市役所や社会保障を利用したい時、あるいは英語がわからなくて困った時はセンターを訪れます。また、昔はギャンブルにはまっていたけど、今は碁に夢中です。毎日数人の友人とセンターで碁をやっています。碁は、精神的に私を活性化してくれるだけでなく、手や指を使うので老化予防にもなります。今年、私は老人会の碁大会で優勝しました。」(77歳・男性)

第一世代の高齢者の多くは、在職中飲食業に携わってきたのであるが、退職するまでは自分の店で一日中過ごしていたため、職場と親族以外の人間関係はなく、長年イギリスに住んでいても英語力はほとんどないに等しい。また職場の人間関係は家族か数人の中国系の使用人に限定されていることがほとんどである。センターは、こうした彼らの退職後の人間関係を、職場と親族以外から近隣へと広げる唯一の場であるといえる。また高齢になって香港からイギリスに住む子供の元へやってきた人にとっても、センターは近隣の中国系の人との人間関係を構築する重要な場となっている。

第一世代でも40歳代～50歳代の人の場合、センターと関わりのあるのは主に女性である。滞在年数の長い男性は、仕事で忙しいため、退職する年齢になるまでセンターと関わりはない。イギリスに來たばかりでアドバイス・サービスを利用する人達もいるが、その場で利用するだけの人が大部分で、人間関係構築という観点からみた場合、センターはほとんど役割を果たしていない。センターが人間関係構築に重要な役割を果たしているのは、特に主婦達においてである。彼女達は、高齢者のケアをする側として、昼食会の準備やホームケアのヘルパーとしてセンターと関わることを通して個人的な知り合いを作っている。さらに、婦人会の様々な活動に参加することを通して、近隣に住む同じ世代の主婦同士の個人的な関係を築きネットワークを形成している。彼女達は、出身地や滞在年数は様々であるが、センターの活動の後で一緒に連れ立って買い物に行ったり、お互いの家を訪れたりして、子供や夫のこと、日常生活の様々なことについて情報を交換している。センターは、近隣に住む40歳代～50歳代の中国系的主婦のネットワーク形成に中心的役割を果たし

ているといえる。

次にチャイニーズ・コミュニティ・センターは、第二世代の人間関係構築にはどのような役割を果たしているのだろうか。散住しているゆえに、ロンドンの正規の学校では中国系の子供が多い学校でも1校に30～40人くらいしかいない。センターの運営する中国語の補習校は、同じ中国系の友人と出会える場所である。また、サマースクールは、夏休み中、近隣に住む中国系の子供達の連帯感を強めているといえる。

しかし、第二世代の若者は、近くのセンターのユースクラブに参加するものはそれ程多くなく、ユースクラブはセンターの活動の中ではあまり活発な部門ではない。バーミンガムの中国系青年プロジェクトの調査によると、近くのセンターのユースクラブに参加したことのある若者は、120人中21.7%である (Parker, Li & Fan 1996)。筆者のインタビューした若者の中にも、ユースクラブの活動に関わった者もいたが、1、2回バドミントンに参加したことがあるとか、サマースクールの手伝いをした程度であった。第二世代は、第一世代とは違って、学校や職場に比べてセンターとの関わりも希薄なので、人間関係構築という観点からみた場合、センターの果たす役割は第一世代に較べて、かなり小さいといえる。

Ⅲ. 第一世代の人間関係のあり方

第一世代の人間関係の特徴は、年齢や性別、滞在年数を問わず、一次的関係においても二次的関係においても付き合いの範囲が同じ中国系に限定されていることである。また、結婚は同じ出身地の者同士が多い。出身地が異なる人と結婚をしている場合でも、同じ中国系同士で結婚をし、中国系以外の人との結婚はほとんどない。

60歳代以上の高齢者は、前述したように長年イギリスに住んでいる人でも、中国料理に関わる飲食業に携わってきた人がほとんどで、退職するまでの職場の人間関係においても中国系以外の人との関わりはなかった。つまり二次的関係においても、中国系の人としか関わりがなかった。チャイニーズ・コミュニティ・センターが近隣の中国系の人と交わることのできる唯一の場を提供し、彼らの人間関係を妻や結婚した子供や孫、兄弟やその子供という親族の範囲から、近隣へと広げる役割を果たしている。60歳代以上の高齢者がチャイニーズ・コミュニティ・センターを通して構築する人間関係は、親しい友人が数人であり、同郷の者とは限らないが、趣味や話が合う中国系の人である。

第一世代の中で40歳～50歳代の人、前述したようにセンターと関わりのあるのは主に女性である。男性の場合、その人間関係は、家族や親族と職場に限定されている。中国料理のレストランやテークアウェイショップで働いている者が大半であるため、職場における人間関係という二次的関係においても、中国系の人との関係がほとんどである。

以下、筆者と長年の付き合いがあるL家の夫婦 (夫：55歳、妻：47歳、両者共香港出身、イギリ

ス滞在25年、ロンドン在住で子供3人)の例を取り上げて、その人間関係のあり方を検討してみたい。

L氏は、中国料理のコックとしてレストランに雇われている。レストランのオーナーはユダヤ系であるが、個人的な付き合いはない。家族以外で個人的付き合いをしているのは、近くに住む定年退職をした実兄だけである。休日には、自分で作った料理を毎週実兄に届けている。それ以外の人間関係といえば、妻を通して知り合った中国系の家族である。近所に住む中国系の3家族とクリスマス・パーティをしたりするが、これらの付き合いは妻を通して知り合った関係である。

L夫人は、中国系の人のみ50人ぐらいが記載された電話帳リストをもっている。これらの人達は、中国系主婦であるが、出身地は様々で、香港、中国本土、マカオ、マレーシア等である。L夫人は、それぞれがどこの出身地であるかをきちんと記憶していて、やはり香港出身者に親近感を抱くと語っていた。これらの人とどのように知り合ったかは、様々である。子供が同じ学校に通っていたとか、チャイニーズ・コミュニティ・センターの老人向けの料理を作っていた時、あるいはセンターの婦人会のコーラス・グループや気功教室に参加した時、中国食材のスーパーマーケットで働いていた時、友人の紹介などである。ここには中国系主婦の個人的なネットワークが形成されているといえる。このネットワークは、近隣に住む人を中心に、ロンドン全域に広がっている。どの人とも同じような関係が結ばれているというわけではない。非常に親しくなり、お互いの家を頻繁に行き来するような場合、これは一次の関係であるといえる。この一次の関係は、たまに個人的感情の行き違いから破綻をきたすこともある。L夫人の場合、歩いて5分の距離に住むマカオ出身の中国系の家族と週に何回も行き来して家族ぐるみで付き合いだったが、感情的な行き違いから、ある日を境に全く付き合いがなくなってしまった。そして、一次の関係以外は、一次の関係と二次の関係の中間に位置付けられるような関係である。これは、つかず離れずの関係であり、破綻することはあまりないが、自然消滅することもある。L夫人の場合、電話帳リストから筆者に紹介してくれた人を数年後には忘れてしまっている場合もあった。彼女達は、たまに週刊誌の貸し借りをしたり、買い物に連れ立ったり、食事をしたり、また電話でおしゃべりしたりする。お互いに子供がどこの学校を出て誰と結婚してどこに住んでいるかというような家庭の状況を良く知っている。L夫人は、これらの人間関係をイギリスに移住後構築したのであるが、このネットワークは、子供の教育や日用品の買い物、アルバイトの就職先、美容院、家のリフォームなど、日常生活に関わる多様な情報を提供する役割を果たしている。L夫人は、移住当初、香港でお見合いをした夫以外、イギリスには誰も知人はいなかったという。そういう彼女は、現在までにこのネットワークを形成しながら、移住先で子供を3人育ててきたといえる。このネットワークの構成員は、同姓や同郷という枠はなく、出身地も多様であり、中国系の女性であることによって結びついている。またL夫人は、チャイニーズ・コミュニティ・センターや中国食材のスーパーマーケットで働いたことがあるが、職場においても中国系の人としか関わりがなかった。

以上、L夫妻の事例は、40歳～50歳代の第一世代の人間関係のあり方を示しているといえる。

Ⅳ. 第二世代の人間関係のあり方

30歳前半以下年齢の人の多くは、幼い頃イギリスに来たか、あるいはイギリスで生まれ、イギリスで教育を受け、イギリス社会で職を得ている。第一世代の人間関係と比較して最も異なる点は、学校や職場という二次的関係において、中国系以外の人との相互交流が格段に多いことである。

前述したように、散住しているゆえに、ロンドンの正規の学校では中国系の子供が多い学校でも1校に30～40人くらいしかいない。小さな町で育った子供は、兄弟以外に学校に中国系の子供はいなかったという場合もある。また就職先においても、色々な民族的背景の人が混ざり合っている場合がほとんどである。たまに中国系の人だけの職場、例えば中国系福祉事務所で働いている場合もあるが、例外的である。

職場や学校において中国系以外の人との相互交流が多い第二世代は、友人や結婚相手をどのように選択しているのだろうか。言い換えれば、二次的関係においては多数派集団との相互交流が多くなった第二世代は、一次的関係ではどのような人間関係を構築しているのだろうか。筆者のインタビューをした20歳代を中心とする第二世代の友人関係は、三つに分類できる。第一は、中国系の友人を持たない者、第二は、中国系の友人もそれ以外の友人も両方持つ者、第三は親しい友人はほとんどが中国系の者である。

第一の中国系の友人を持たない者の中でも、15、6歳までは中国系の友人がいた者と、現在に至るまで全く中国系の友人がなかった者がいる。

全く中国系の友人がなかった者とは、例えば白人がほとんどの私立学校に通っていた者や、中国系の生徒が学校に数人いても、友人にはならなかった者である。後者の場合、筆者のインタビューした者はインド系やブラックというマイノリティの友人を持っていた。また、15、6歳までは友人の紹介や中国語の補習校で出会ったりした中国系の友人を持っていたが、香港の音楽や映画に興味がなくなるに従って、中国系の友人と疎遠になっていった者もいる。中国系の友人を持たない者は、中国語を話す機会は親との会話に限られていく。

第二の中国系の友人もそれ以外の友人も両方持つ者は、その友人関係のあり方は多様である。例えば大学では中国系以外の友人を持ち、週末に家に帰ると親を通して知っている中国系の幼なじみと付き合ったりする者、中国系教会を通して中国系の人との付き合いが多いが親友は大学時代に知り合ったインド系の友人である者、ほとんどが中国系以外の友人であるが、補習校で知り合った中国系の友人ともたまに会う者などである。

第三の中国系の友人しかいない者の場合でも、正規の学校に中国系の生徒が少なかったという状況は共通している。中国系の友人とは、正規の学校で知り合ったり、親の友人や親戚との付き合いを通して知り合った幼なじみとか、友人や兄弟の紹介、中国語の補習校やチャイニーズ・コミュニティ・センターのユースクラブ、あるいは中国系教会を通して知り合った中国系第二世代である。そして、多くの大学には、中国系第二世代による団体（サークル）がある。親の出身地は様々であ

るが、中国系第二世代という共通項をもつ集団である。同じ中国系でも香港からの留学生とは、別々のサークルを作っている。このようなサークルは、各マイノリティがそれぞれ形成している。サークルの目的は、お互いの親交を深めることで、パーティーやリクリエーションを催すことが主な活動である。大学入学以前は、中国系の友人もそれ以外の友人も両方を持っていた者でも、大学入学後にこのような中国系第二世代のサークルに入り、イギリス全土から大学に来ている中国系第二世代の友人が増えたり、また付き合いの範囲が中国系第二世代の友人に限定されていく場合もある。筆者のインタビュー対象者で中国系第二世代の友人を持つ者は、中国系第二世代の友人は家庭的な背景に共通点があることによって、わかりあえる部分が多く、安心感があると語った。

近年、大学における中国系第二世代によるサークル出身者が中心となって、中国系第二世代のウェブサイトがインターネット上に作られた。⁽¹¹⁾ 主な活動は、サイト上で意見交換をしたり、イベントやパーティーを企画して、中国系第二世代同士の親交を促進することである。政治的な活動は全くしていない。就職後20歳代の中国系第二世代は、様々な民族的背景の人が混ざりあう職場で働いているが、週末は、ウェブサイトの企画する、同じ年代の中国系第二世代だけのパーティーに参加する者も多い。

そして、大学、就職と人生のステップを昇るにつれて、大学のサークル活動やウェブサイトを通して、以前は中国系以外の友人を持っていたも、中国系第二世代の友人しか持たない者が増えていくことが指摘できる。筆者のインタビュー対象者である20歳代の3人兄弟の場合、長男と長女は友人が中国系第二世代に限られるが、次女は他の民族的背景の友人も持っている。3人は大学入学以前は中国系の友人もそれ以外の友人も持っていたが、長女は大学時代に中国系第二世代のサークルに参加したことにより、長男はサークルには参加していないが大学時代から友人関係が中国系第二世代に限られていった。これに対して、次女の大学には中国系第二世代のサークルはなく、他の民族的背景の友人と付き合っていて、就職後もその方がいいと考えている。次女は、中国系第二世代の集まるパーティーには行ったことがないし、色々な民族的背景の友人を持っていた方が多くを学べるし心が広がると語っていた。統計的な数字で示すことはできないが、次女によれば、自分のように就職後でも他の民族的背景の友人を持っている者は、中国系第二世代の若者の中では少数派であるという。それは、当然結婚相手も中国系第二世代から選ぶ者が相対的に多くなることを意味しているのである。

筆者がこれまで知り合った20歳代を中心とする中国系第二世代約50人の中で、中国系第二世代以外の配偶者を持つ者は、アイルランド系の男性と結婚をした30歳代前半の女性だけである。第二世代の結婚相手は、同じ中国系第二世代を選択する方が多いことが指摘できる。色々な民族的背景の友人をもつ者でも、恋人は中国系第二世代である場合が多い。つまり、第二世代においては、二次的関係においては他の民族的背景の人との相互交流が多くなっているが、一次的関係においては、他の民族的背景の友人をもつ者でも、恋人や配偶者には中国系第二世代を選択していることが指摘できるのである。

V. 考察—イギリスにおける中国系移民のエスニシティ

イギリスの中国系第一世代の場合、その人間関係は、一次的関係はもちろんのこと、二次的関係においても付き合いの範囲は中国系というエスニック集団内に限定されていた。チャイニーズ・コミュニティ・センターに関わることによって構築される一次的関係は、近隣の中国系であれば同郷や同姓という枠を越えるものであったが、中国系というエスニック集団の境界を越えて友人関係が構築されることはなかった。それゆえ、第一世代のエスニシティは、中国系以外の人との相互作用による影響はほとんどない。

第二世代の場合、第一世代と違って、学校や職場での二次的関係において中国系以外の人との相互作用が進んでいるが、一次的関係、特に恋人や配偶者の選択において中国系第二世代を選択する傾向があった。筆者は以前第二世代の若者の文化的アイデンティティのあり方について調査をしてまとめた(山本 2003)。その結果、「チャイニーズ・ブリティッシュ」とか「ブリティッシュ・チャイニーズ」という言説が形成されていなく、各個人が、自己形成過程において「ブリティッシュであること」「チャイニーズであること」の意味を日常的な様々な人との相互作用の中で書き換えて、自らを位置付けていることを指摘した。「ブリティッシュである」という位置取りは、例えば日常的な人との関わりの中でイギリス社会を構成する一員として自らを意識したり、香港に行って自らの他者性を認識したり、あるいは完璧な英語を話すことに基づいて選択されていた。ここで興味深いのは、自らを「ブリティッシュである」と位置付けている者でも、恋人や配偶者には中国系第二世代を選択したり、中国系第二世代の友人しか持たない者もいることである。つまり文化的アイデンティティの選択と、人間関係のあり方とは重なってはいないのである。

このずれを理解するには、文化的アイデンティティの選択と友人や恋人や配偶者の選択の違いに留意する必要がある。文化的アイデンティティの選択は、イギリス人や香港の人、あるいは香港からの留学生等の「他者」との相互作用の中での自らの位置取りの選択であるといえる。それに対して、友人や恋人や配偶者の選択という人間関係のあり方は、「他者」との関係性の中での自らの位置取りではない。ではなぜ中国系第二世代は、特に恋人や配偶者に同じ中国系第二世代を選ぶのが問題になる。

中国系第二世代は、総じて、親の出身地への帰属意識は希薄で、第一言語は英語であり、中国語の能力は親と会話のできる程度で、読み書き能力はほとんどない。イギリスの学校に通い、中国系以外の人との相互作用によって、親の背景にある文化よりもイギリス社会の文化をより身に付けているといえる。彼らになぜ恋人や配偶者を同じ中国系第二世代から選択するのかを問うと、「家庭的背景が似ていてわかり合うことができる」という答えが返ってくる。この語りは、中国系第二世代が経験や認識を共有しているゆえに、恋人や配偶者を同じ中国系第二世代から選ぶことを示している。

中国系第二世代が経験や認識を共有していることを端的に示しているのが、彼らの間で用いられる「あの人はよりブリティッシュだ。」「あの人はよりチャイニーズだ。」という表現である。例え

ば、自分のボーイフレンドは、イギリス生まれの中国系第二世代だが、中国人がほとんどいない環境で育ったので、考え方は「自分よりもよりブリティッシュ」というような表現をする。また、中国系第二世代同士で結婚した女性は、夫が「自分よりもよりチャイニーズ」なので、子育てや日常の様々なことでぶつかり合うと語っていた。これは中国系第二世代同士がお互いを理解するコードだといえる。「ブリティッシュ」と「チャイニーズ」の間に各個人を位置付けて相手がどのような人なのかを表現するのである。

中国系第二世代の間でよく用いられるこのような表現の背景には、ほとんどの者が学齢期になると中国語の補習校に通った経験をもっているとか、中国語の理解度、親はテークアウェイショップやレストランを営んでいて忙しい中で学校生活を送ったとか、学校での差別の経験というような、中国系第二世代のみに共有されている経験や認識が横たわっていると考えられる。そうした共通の経験や認識があるからこそ、「ブリティッシュ」と「チャイニーズ」の間に各個人を位置付ける表現ができるのであり、そのような共通の経験や認識が、中国系第二世代同士の恋人や配偶者の選択に繋がっていると考えられる。つまり、中国系第二世代は、人間関係構築の視点から検討すると、特に恋人や配偶者の選択によって集団のバウンダリーが保持されているといえるのである。

では、そうしたバウンダリー内部には、共有されている「文化」はあるのであろうか。イギリスの学校に行き、親の背景の文化よりもイギリス社会の文化をより身につけた第二世代には、一見すると共有する「文化」はないように見える。しかし、筆者は、第二世代の共有する「文化」は存在すると考える。それは、数人のインフォーマントが指摘した、「典型的な中国系第二世代若者像」のもっているものである。特定のスポーツ（バドミントン）を好み、R&Bやヒップホップといった黒人音楽にあこがれ、ファッションでは黒を好み、同じ髪型をしている。そして前述したような相手を理解する共通のコードを共有しているのである。この「文化」は、親の出身地の文化とは関わりがなく、何ら「中国人性」をアピールするものではないし、またイギリス社会の中では中国系第二世代以外の人々には知られず存在感を持っていない。つまり、現在エスニシティとして表出しているとはいえないが、中国系第二世代の人間関係構築という視点からみたバウンダリーのある集団内部で共有されている「文化」といえるのである。

VI. おわりに

以上、イギリスにおける中国系移民のエスニシティを人間関係構築という視点から、第一世代、第二世代の違いに留意して検討した。今後、イギリスの中国系移民のエスニシティがどのように表出してくるのか、あるいは表出しないのかは、第二世代の集団のバウンダリー内で維持されている「文化」の行方にかかっていると考えられる。現在では主流社会にアピールする力をもたない「文化」がどのように変化していくのかを見守っていききたい。さらに、第二世代が結婚し、第三世代が育ってきている現在、新たな世代の出現も視野に入れていく必要性があろう。

【注】

- (1) 第三世代、第四世代と世代を経ても、インフォーマルな付き合いは同じエスニック集団内の構成員に限られると指摘している (Keefe & Padilla 1989 : 52)。
- (2) イギリスの国勢調査においてレイスやエスニックに関する質問項目が初めて導入されたのは、1991年である (青柳 2004 : 32)。2001年の国勢調査では、混血 (mixed) という枠が作られた。イングランド、ウェールズでは White, Mixed, Asian or Asian British, Black and Black British, Chinese or other ethnic group という分類が用いられている。スコットランド、北アイルランドではそれぞれ別の分類方式が用いられている。非白人人口は、全人口の7.9%で、中国系は247,403人で、全人口の0.4%、非白人人口の5.3%を占めている。
- (3) 2001年のセンサスによると、非白人人口の45%はロンドンに集中して居住している (Office for National Statistics, April 2001, Census 2001, Regional distribution of the non-White population)。
- (4) 2002年のGCSE (General Certificate of Secondary Education) において、中国系の生徒がエスニック集団の中で最も成績が良いことが指摘されている。中国系女子の77%、中国系男子の71%が、GCSEのA～Cグレードを5つ以上取得している (Office for National Statistics, April 2001, Census 2001, Pupils achieving 5 or more A-C at GCSE :by sex and ethnic group, 2002, England)
- (5) 2001年のセンサスによると中国系人口の19%は自営で、中国系男性の半分は飲食業に携わっていることが指摘されている。(Office for National Statistics, April 2001,Census 2001,Self employment as a percentage of all in employment: by ethnic group) しかし、この数字は第一世代、第二世代を合計した数字である。第二世代は教育を受けることによって、様々な職種に進出している。
- (6) 日本における近年の同姓団体の研究としては、吉原和夫・鈴木正崇・末成道男編『<血縁>の再構築—東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社 2000年がある。これは、主に中国大陆や華僑・華人社会において、「同姓団体」の形成過程に注目し、結成理由と背景を考察し、漢族を中心にした家族・親族を支える父系出自原理が東アジアでいかなる位置づけを与えられているかを検討している。
- (7) 調査は、ロンドンの主にハリンゲイ地区の香港出身の一家庭に滞在し、この地区の中国系住民を中心に行なった。
- (8) イギリスの中国系移民には、マレーシアやシンガポール出身者もいるが、少数派である。彼らは、香港の新界出身者とは違って、留学でイギリスに来了後、移住した人が多く、英語能力は高い。
- (9) 2001年のセンサスによると、中国系人口の半数以上が無宗教である (Office for National Statistics, April 2001,Census 2001,Religious composition of ethnic groups)。

(10) 2003年8月に訪問。

(11) いくつかサイトはあるが、代表的なものは以下のサイトである。

British Chinese Society(<http://www.britishchinese.org.uk/>)

【引用文献】

- Barth, F., 1969, "Introduction," Barth, F. (ed.) *Ethnic Groups and Boundaries*, Little, Brown, Boston.
- Chann V.Y.F., 1982, "Paper to National Conference on Chinese Families in Britain", National Children's Centre, *The Silent Minority*, The Report of the Fourth National Conference on the Chinese Community in Great Britain, November 1982, Huddersfield, NNC.
- The Chinese in Britain Forum & The Chinese Information and Advice Centre, 2001, *UK Chinese Community Service Directory*.
- Chinese Community Centre, 2001, *21 Years of serving the community*.
- Jones, D., 1979, "The Chinese in Britain: origins and development of a community," *New Community*, 7-3, pp.397-402.
- Haringey Chinese Centre, Annual Report 1997-1998, 2000-2001.
- Hong Kong Government Office (London), 1989, 1992, *Chinese Organization in the United Kingdom* (Pamphlet), London.
- Keefe, Susan E. & Padilla, Amado M., 1987, *Chicano Ethnicity*. Albuquerque, The University of New Mexico Press.
- Ng, K.C., 1968, *The Chinese in London*, Oxford University Press.
- Lambeth Chinese Community Association, 1992, *Exploring Our Chinese Identity*.
- _____, 1994, *Another Province; New Chinese writing from London*.
- London Kung Ho Association, 1990, *Kung Ho Association Journal*.
- Office for National Statistics, April 2001, *Census 2001, Population of the United Kingdom: by ethnic group*.
- Parker D., J. Li. and J. Fan, 1996, *The Needs of Young People of Chinese Origin in Birmingham*, Birmingham Chinese Youth Project.
- 青柳真智子編 2004『国勢調査の文化人類学』古今書院
- 綾部恒雄 1993『現代世界とエスニシティ』弘文堂
- 柿沼秀雄 1991 「英国華僑と華僑教育」、西村俊一編著『現代中国と華僑教育』、多賀出版、294-312頁。
- 竹沢泰子 1994 『日系アメリカ人のエスニシティ』、東京大学出版会。
- 山本須美子 2002 『文化境界とアイデンティティ―ロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会
- ワトソン・L・ジェームズ 1995 『移民の宗族―香港とロンドンの文氏一族』(瀬川昌久 訳) 阿吡社

[Abstract]

The Ethnicity of Chinese People in Britain: A Comparative Analysis of the Construction of Human Relationships by First and Second Generation Chinese Immigrants

YAMAMOTO Sumiko

The purpose of this study is to examine the ethnicity of Chinese people in Britain, based on fieldwork conducted in London which aims to clarify how first and second generation Chinese immigrants have constructed human relationships. Taking the perspective developed by Keefe and Padilla's argument as to whether Chinese people can form primary or secondary human relations with the dominant majority group, this article seeks to compare the means used to construct human relations by the first and second generations.

Most first-generation Chinese immigrants in Britain were once farmers in the New Territories of Hong Kong, and were engaged in the trade of catering Chinese food. The population of Chinese immigrants is estimated to be about 250,000 in the 2001 census. One feature of this population is that their residences are scattered all over the country as they run their take-away shops. This is in marked contrast to other ethnic minorities in Britain concentrated in large cities. "Chinatown" districts recognized in Britain are commercial areas, but not residential ones. And today, most of the young Chinese have been born and brought up in Britain. A high percentage of these receive higher education, and are engaged in a greater variety of occupations.

To sum up, the first generation is constructed both of primary and secondary human relationships, only with other Chinese, but not with members of the dominant host society. Chinese community centres are thus the most important organizations in Britain for first generation Chinese to construct human relationships. Chinese community centres provide opportunities for them to construct primary human relationships with other Chinese coming from various areas. The first generation does not interact with the majority, therefore the ethnicity of the first generation is not affected by the majority.

In contrast with the first generation, members of the second generation interact with the host culture both at school and at work. Their first language is English, and they acquire and internalize more British culture than the cultural background of their parents. They tend, however, to form their primary relationships with other second-generation Chinese partners performs the role of maintaining the boundaries of the Chinese as an ethnic group.

‘Culture’ within this boundary does exist. The second generation tends to like black music such as ‘hip-hop’ of rhythm-and-blues, the same fashions and hairstyles, and the same sports. These commonalities shared by the second generation can be described as their own ‘new emerging culture’. It bears no likeness to the idea of ‘being Chinese’ held by the dominant society, nor is it connected with their parents’ background culture, but the ethnicity of Chinese people in Britain depends upon the future development of this ‘new emerging culture’.